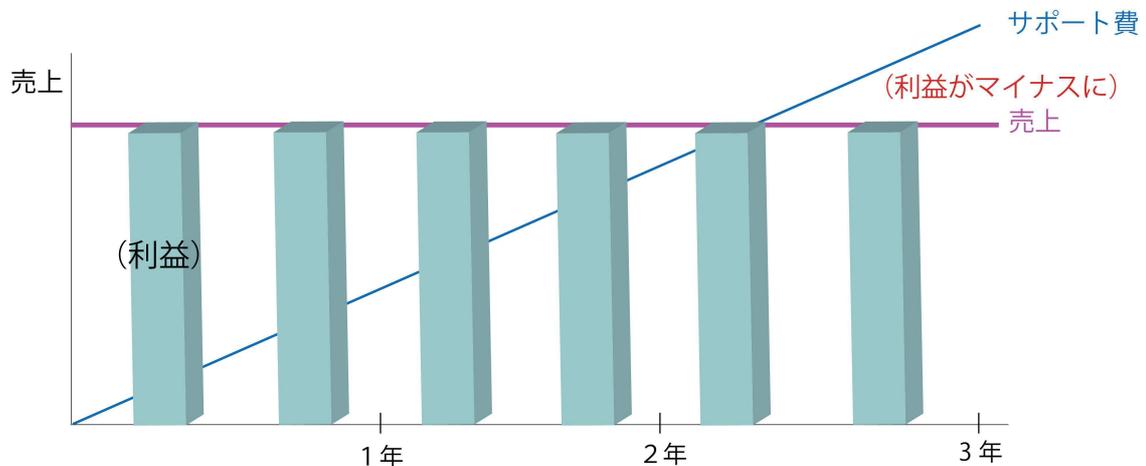


1. 15年前にどうしてJavaによるクラウドを開発し始めたか。
それが、OSに依存しない、安価なシステムである理由とメリット。

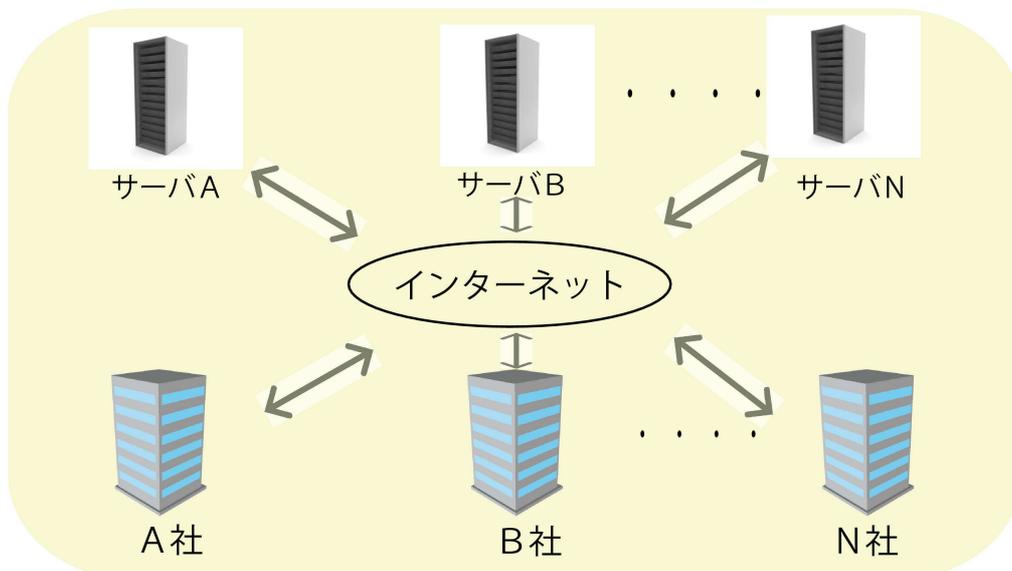
版元ごとに開発(NOA-2000、MRDB)したシステムを、納品する方法で販売してきましたが、売れば売るほどサポート(故障、不備、オペレーションミスなど)が増し、サポート人件費が高騰してしまいます。人件費を抑えるため、一人のサポート要員にたくさんのユーザーをかかえさせると、ユーザの不満が増幅されてしまいます。

販売とサポートのバランスを考えて販売価格を高くする方法もありますが、価格競争力も失い、ユーザの理解も得られません。

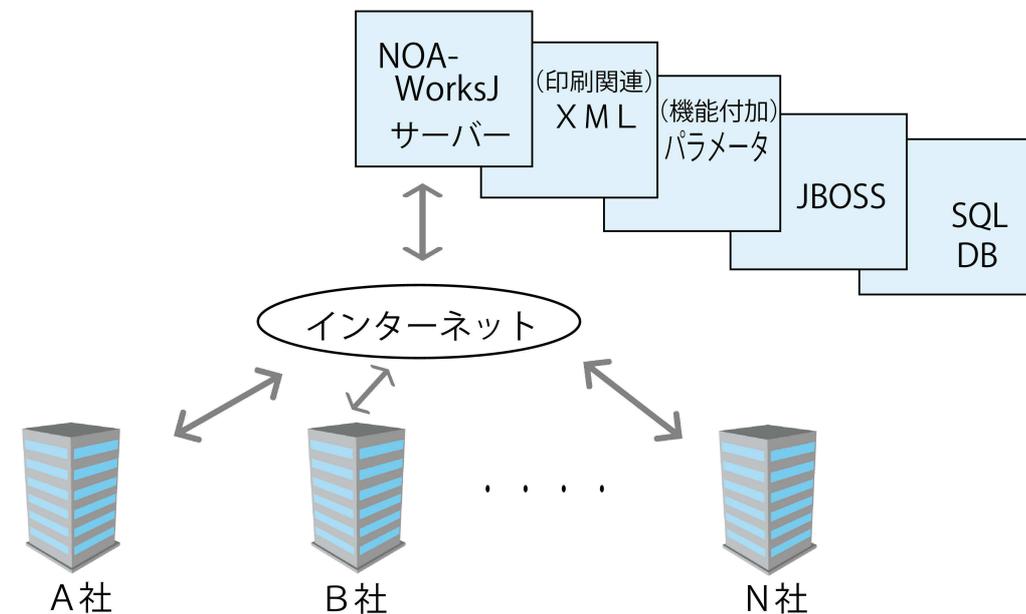


上記の課題を解決する最初のアイデアが、インターネットでサーバを利用するクラウド方式に、遠隔サポート機能を付加したシステムが人件費を極限まで抑えることができる。

しかし、版元ごとに開発することでサーバが増えてしまえばやはり管理や設備に費用がかかることになり、高価なシステムになってしまう



次のアイデアが、一つのサーバを全ての版元が共用使用するクラウド方式に、遠隔サポート機能を付加し、版元ごとに付加する機能をXML表現のファイル化と機能の切り替えをパラメータ化することで実現しました。

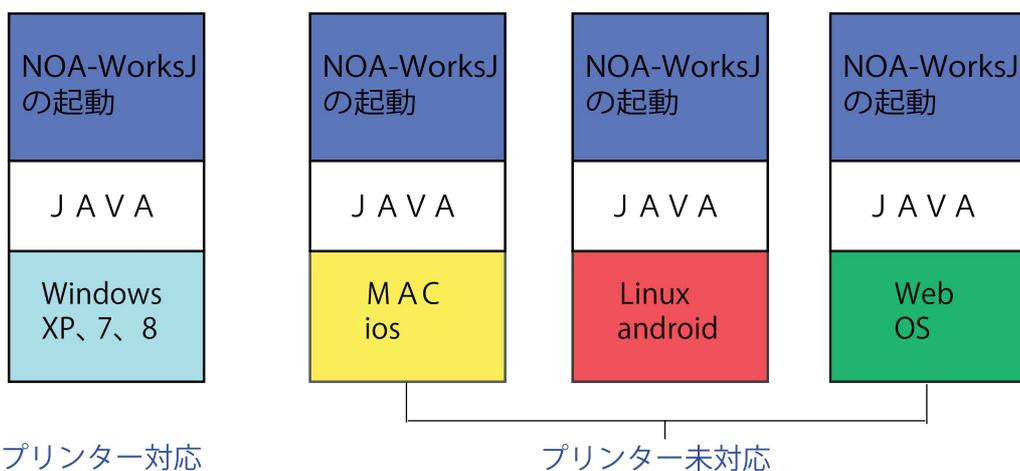


一つのサーバを全ての版元が共用使用することで、各社ごと修正する作業がなくなり、サーバ管理コストの低減と高品質を同時に実現することになりました。

(消費税5~8の対応も一つのシステム修正で全社に反映する。)

また、端末もJAVAにすることでOSやバージョンなどに影響を受けない構造となりました。

また、現在は Windows のみ対応していますが、他の OS への対応も可能。



2. 開発の歴史

創業期(1983～)

30年前にデータベースとワープロ機能を融合させたNOA-110 (MS-DOS)を開発、販売開始、富士通、IBM、日立、EPSON、などに正式採用される。

業種対応期(1985～)

NOA-310となり、業種別のアプリケーションの提供も合わせて開始する。25年前(1988)年トーハンの紹介で曙出版様へ出版社システムとして納品する。その後、NOA-2000Rに進化し、多くの出版社、物流倉庫へ納品する。(オフコン主流の時代にパソコンはめずらしい存在でした。)

新システムの開発(1993～)

Unix (Linux) 、Windows共通の開発ツールNOA-Uix、WinDBの 開発開始

出版社システムに特化(1995～)

MRDBを使い、C/Sモデルの出版社システム(一新多助 のち 多新多助)を開発。ベネッセコーポレーション様、日本能率協会様、偕成社様、オーム社様、建設物価調査会様などに納品する。

クラウドシステムの開発(1998～)

NOA-Uix、WinDB のノウハウを活用し、出版社システム (NOA-WorksJ)の開発を開始するも、JAVA、インターネット回線、SQL(DB)、Linuxサーバなど、どれを改良しても実用スピードにならず悪戦苦闘する。

クラウドシステムの完成、販売開始(2002～)

JAVA(J2EE)、インターネット回線(ADSL)の高速化、Linuxサーバの高速化、JBoss活用によるSQLサーバ連携の安定化など最新技術の導入で十分な実用スピード、安定運用を実現する。

その後の経過

MRDBでのシステム(一新多助 のち 多新多助)を販売停止する(2003～)過去のユーザをクラウドに移行、新規客も増えて、取り扱い版元は、現在約270社となる。